

「ぼくのセンセイ」

小島 聡一郎

登場人物

西虎太郎（38）

主人公。売れない漫画家。

郡司すみれ（21）

漫画家。『極道ドクター』の作者

織田健司（37）

週刊チャンスの編集者。

内村章介（28）

月刊チャンス編集者。

郡司かおり（70）

すみれの祖母。入院中。

司会者

女子アナ

看護師

プロデューサー

ディレクター

あらすじ

西虎太郎（38）は売れない漫画家。かつては、「週刊少年チャンス」で「どすこいヤスシ」を大ヒットさせ、巨額の印税を手にした。しかし、その後の作品はぱっとせず、すべて早々に打ち切られてしまう。

とある日、虎太郎は「別冊少年チャンス」の連載作家、墨田スミロウのアシスタントを依頼される。最初は乗り気でなかった虎太郎だったが、当面の家賃を賄える報酬になびき、渋々依頼を引き受ける。

いざ仕事場に行ってみると、美しい女性が一人いた。墨田スミロウの正体は郡司すみれ（21）だった。戸惑いつつも、仕事のない生活を長年過ごしてきた虎太郎は、張り切って漫画製作を手伝う。だが、すみれは感心するどころか、センスが古く、くすぶっている間に作画の腕も落ちた虎太郎を執拗にけなす。実はその超スパルタな性格ゆえに、今までアシスタントが一人も定着しなかったのだ。

ボロクソにけなされながら仕事をこなす虎太郎。しかし、いつまで経っても信頼しようとしないうすみれに、ついに怒りが爆発し、すみれを困らせようと、締切り直前の大事な時期に無断欠勤する。

だが、休んではみたものの、次第にすみれを案じ、不安になっていく虎太郎。そんな時に、編集者からすみれに入院中の祖母がいることを知り、しかもその手術の日が締切の日だと聞く。結局大事には至らなかったが、自分の甘さを改めて感じた虎太郎。すみれに認められるまで、アシスタントを続けることを決意するのであった。

○テレビ番組

出演者が司会者、女子アナ、ゲスト6名で構成されたバラエティ番組。

西虎太郎（38）、ゲストの一人としてひな壇に座っている。

画面の左上に、番組のロゴ『花形仕事のそこんところ』。

司会者「さ、恵ちゃん。次はどの仕事の裏側を教えてもらいましょうか」

女子アナ「はい、次は漫画家の仕事のそこんところ。本日は、実写化もされました、あの伝説のギャグ漫画『どすこいヤスシ』の作者、西野コウタロウ先生にお越しいただきました！」

観客の拍手に、ぺこりと頭を下げる虎太郎。

○虎太郎のアパート・居間

散らかった狭いワンルーム。

シンクに洗っていない皿がたんまり。そ

れらを照らすキッチンで電球が切れかけている。

虎太郎、カップラーメンを食べながらテレビを鑑賞中。

○テレビ番組

大きなパネルの前に立つ司会者。

様々な質問のフリップが貼ってある。

司会者「まあ、最初ですから、答えやすい質問

から行きましょうかね。それじゃ

あ、（指さす）これ。最高月収は？」

笑いの効果音。

司会者「違うか！」

虎太郎「別にいいですよ。ドラマ化とか色々

重なった時は2千万ぐらい」

「えー」、のテロップと歓声。

女子アナ「すごい」

司会者「やっぱり漫画家さんは夢があります

ねえ。一発当てれば、一生困らない

じゃないですか」

虎太郎「（満更でもない）いやあ、どうですかね」

○虎太郎のアパート・居間

カップラーメンをすする虎太郎。

ごみ箱がくしゃくしゃになった漫画原稿
でいっぱい。

○テレビ番組

司会者「その後は作品を発表されていないようですが？」

虎太郎「今ちよつと休んでるんすよ」

司会者「え、なんですか」

虎太郎「漫画制作ってしんどいんすよ。毎週毎週締切との闘いで。まあ、この生活にも飽きてきたんで、ぼちぼち短編でも描こうかなとは思ってますけどね」

司会者「優雅でいいなあ、私なんか毎日必死ですよ。恵ちゃん、フリーなんてなる

もんじやないよ？」

女子アナ「（苦笑）ご忠告、ありがとうございます

います。さて、次のそこんとこク

エストヨンですが……」

テレビの電源が切れ、画面が真っ暗に。

○虎太郎のアパート・居間

虎太郎、リモコンを投げ捨ててカップラ

ーメンのスープを飲み干す。

虎太郎「ふう。うまつ」

タイトル「ぼくのセンチ」

○光栄出版本社・外観

モダンなビル。

大手総合出版社、光栄出版の本社。

○同・1階待合スペース

四人掛けのテーブル。

その一席に、無然とした様子で座ってい

る虎太郎。

織田健司（37）、小走りで現れる。

織田 「いやあ、お待たせ……、（虎太郎に

気づき）なんだ、あなたですか」

虎太郎 「悪いな、忙しいところに」

織田 「（座って）おかしいと思いましたよ、

副編集長を指定する持ち込みなんて」

虎太郎 「こうでもしねえと会ってこないだ
ろ？」

織田 「手短にお願いしますよ」

虎太郎 「いい原作、入ってるか？」

織田 「またそれですか。何度も言っている
でしょう。あなたはもううちの専属
作家じゃない、つまり構想外、戦力
外なんだ。お願いですから、もうこ
ういうのやめてくれませんか」

虎太郎 「こないだ原作の新人賞あったばっか
りだろうよ」

織田 「一発屋のアラフォーに頼むものはあ
りませんよ」

虎太郎 「冷てえな。お願い、昔のよしみでさ」

織田 「申し訳ありません」

虎太郎 「……あーあ。オダケンも偉くなった

もんだなあ。『どすこい』のとき、

先生先生ってしっぽ振ってたのが嘘

みたいだぜ。あれがなかったら、お

前なんてとつくに飛ばされてるぞ？」

織田 「先生がもう一作でもヒットを描いて

いたら、僕はとつくに編集長になれ

てますよ。（立ち上がり）もういい

ですか」

虎太郎、去ろうとする織田の腕を掴む。

虎太郎 「もうちょっとだけ付き合ってくれだ

っていいだろうよ」

織田 「（手をはらい）充分付き合っただけ

たじゃないですか、十年間も。もう

勘弁してください」

と、立ち去る織田。

虎太郎、机を思いつきり拳で叩く。

その様子を遠くから眺めている郡司すみ

れ（21）。

○競馬場・走路

最終コーナーを周る競走馬の群。

○同・観客席

虎太郎、最前列で数枚の馬券を握り締め
ている。ヒートアップする観客。

実況 「さあ、第四コーナーをカーブして、
残り三百メートル」

虎太郎 「させっ、させこの野郎！」
各馬がゴールする。

虎太郎 「（頭を抱え）ふざけんなよー」
実況 「ラッキータイガー、最下位イ！ 断
トツ、断トツの最下位です！」

○同・食堂

競馬新聞をテーブルに広げ、考え込んで
いる虎太郎。

その肩をポンポンと叩く手。内村章介

(28) である。

内村 「ラッキータイガーはもう潮時ですね」

虎太郎 「(振り向き) あ？ 誰だお前」

名刺を差し出す内村。

内村 「申し遅れました。こういう者です」

虎太郎、訝しげに名刺を眺める。

虎太郎 「(読み上げる) ウチムラシヨウスケ。

チャンスの編集者か」

内村 「月刊のほうですけどね。あつ、ここ

いいですか」

と、虎太郎の向かいに座る内村。

虎太郎 「戦力外に何の用だよ。年末特番のオ

ファーか？」

内村 「(姿勢を直し) 単刀直入に言います。

僕の担当、墨田スミロウ先生のアシ

スタントをしてくれませんか？」

虎太郎 「……なにを言うかと思ったら」

内村 「あ、連載の依頼じゃなくてすみませ

ん」

虎太郎 「(動揺) べ、別にそんなの期待して

ねえよ！」

内村 「あ、そうですか？ よかったア！

実はこんな風に声をかけて、期待させてしまったらどうしようと心配してたんですよ」

虎太郎 「（喧嘩売ってんのかこいつ）」

一人で「全ッ然そんなつもりなかったからなあ」とほっとしている内村。

虎太郎 「ていうか、担当編集者がいるってことはもう連載中だろ？ アシなんて腐るほどいんだろ」

内村 「それが、墨田先生はちよっぴり曲者です。誰一人として定着しないんですよ」

虎太郎 「それでよくやってこれたな」

内村 「超絶速筆なんで、なんとか。でも来月から他誌でもう一本連載始まっちゃうし、なにより今描いてる『極道ドクター』がドラマ化されるんですよ。その脚本のチェックとか、本誌

とのコラボ企画とか色々な仕事増え
ちゃって」

虎太郎 「だからってなんで俺なんだよ。俺プ
ロなんだけど」

内村 「（遠い目）僕、昔むかし、本当に
昔、『どすこいやすし』が連載され
ていた頃、西野先生の大ファンだっ
たんですよ」

虎太郎 「人の栄光を昔話みたいに……」

内村 「それがきっかけでうちの会社に入る
うと思っただぐらいです。そんな僕の
耳に、西野先生と織田副編集長との
やりとりが入ってくるではありません
んか。（一人二役で）仕事くれ、無
理だ、頼むからくれ、お前に描かせ
る原作はない、このビチクソ野郎！
って」

虎太郎 「脚色が過ぎるわ。ていうか、あの時、
隣のブースで盗み聞きしてたのかよ」

内村 「聞こえてしまったんです。とにかく、

それで是非お助けになればと思っ
たわけです」

虎太郎 「（鼻で笑う）恩着せがましい、自分
のためだろ。三年以内に人気作品を
立ち上げなきゃ即異動だもんな、編
集者ってのは」

内村 「……お言葉ですが、実際困ってらっ
しゃるんでしょ？」

虎太郎 「え？」

内村 「稼がれた億単位の印税も使い果たし
たと伺いましたけど」

虎太郎 「余計なお世話だ。悪いが、アシなん
てごめんだ。生活が多少苦しかろう
が、俺はそこまで落ちぶれちゃいね
えよ。じゃあな」

虎太郎、出口に向かう。

内村、虎太郎の前に回り込む。

内村 「そこをなんとかお願いします！」

虎太郎 「無理無理」

内村 「そこをなんとかお願いします！」

虎太郎 「嫌つつってんだろ」

内村 「報酬ははずみますから！」

虎太郎 「だから嫌っ……。いくら？」

内村 「一ヶ月限定で、二十万でいかががでしよう」

虎太郎 「え……。…」

虎太郎、誘惑に負けそうになるが、それを振り切るように頭を大きく横に振る。

虎太郎 「……。あのさ、南原君」

内村 「内村です」

虎太郎 「お金の問題じゃないんだ。漫画家にとって、作品は言わば子供なんだよ。どんなに連載が苦しくても、自分の腹を痛めたからこそ続けられるんだ。じゃなきゃあんなもん到底割に合わねえ。ましてや他人の子育てにそれだけ汗をかけて言われたって、そりゃ無理な話なんだよ」

内村 「……。…」

虎太郎 「わかったら帰ってくれ」

内村 「三十万」

虎太郎 「（即答）やりましょう」

○マンション・入り口

超高層マンション。

たばこを吸いながら、憎々しげに見上げる虎太郎。

○同・高層階の廊下

エレベーターの到着。

すみれの部屋に向かう虎太郎。

漂う上品な雰囲気、気圧され気味。

○同・すみれの部屋・リビング

リビング兼仕事部屋に入る虎太郎。

広いが、相当散らかっている。壁沿いに、資料や漫画で詰まった本棚が隙間なく立ち並んでいる。

漫画制作用の机が二つ。一つは入口の近く、一つは窓際。

虎太郎、リュックを床に置き、床のゴミを避けながら窓の前まで歩く。
大きな一枚ガラスの向こうに都会が広がっている。

虎太郎「儲かってやがんなあ」

虎太郎、ふと窓際の机の上に漫画の原稿があるのを発見し、数枚見る。

内容はハードボイルドな医療漫画。タイトルは『極道ドクター』。

虎太郎「……うめえ」

と、年期の入った『どすこいやスシ』の第1巻が机の上にあることに気づく。

思わず手に取る虎太郎。複雑な表情。

× × ×

虎太郎、頬杖をついて作業をしている。と、玄関からドアの開く音。

すみれ、スマホをいじりながら、勢いよく入室する。ヘッドホンから激しいロックが音漏れしている。

窓際の机まで歩き、鞆をドサツと置く。

虎太郎「？」

すみれ、そのまま部屋を出る。

虎太郎「（見送り）なんじゃあれ」

首を傾げる虎太郎。

と、マグコップを片手に、すみれが再び入室する。

すみれ「（ぼそっと）あつ、鍵かけなきゃ」

すみれ、マグコップを勢いよく虎太郎の机に置き、また部屋を出る。

その勢いで、中のコーヒーが原稿と虎太郎のズボンにこぼれる。

虎太郎「あつつ！ え、というか原稿！」

虎太郎、慌てて原稿を手で仰いだり、息を吹きつけたりして乾かそうとする。

虎太郎「……だめだ。これじゃホワイトで修正できない。（舌打ち）あのクソガキ、なにすんだよー」

虎太郎、気配を感じて上を向く。

ヘッドホンを首にかけたすみれが目の前で仁王立ち。

すみれ「てか、おじさん誰？」

虎太郎「えっと、今日からお世話になる西野
だけど、お嬢さんは……、もしかして娘さん？」

すみれ「は？」

虎太郎「いや、だから先生の」

すみれ「……」

すみれ、虎太郎の机の上にあるタバコの箱から一本取り出し、火をつける。

虎太郎「お、おい」

そのままマグカップを手に自席に向かうすみれ。

虎太郎「無視か。しつげがなってねえな先生」
すみれ、椅子の上に膝を立てて座る。膝の上にクリップボードと原稿用紙を乗せて描き始める。

虎太郎「お、おい！ それに勝手に描くな！」
焦って駆け寄る虎太郎。

だが、慣れた手つきで線を書き込むすみれに驚きを隠せない。

下書きの状態の原稿用紙に、緻密な手術
シーンが徐々に浮び上がる。

虎太郎「え……」

すみれ「（描きながら）おじさんさあ、アシ

専門？ 自分でも描いてんの？」

虎太郎「（我に返る）一応、プロだけど」

すみれ「ああ、そう。でもストーリー作り下

手くそでしょ？」

すみれ、手を止めて顔を上げる。

すみれ「だって医療漫画の作者は男、つてい
う固定概念のある人が面白いもの作
れるわけねえし」

すみれ、それまで描いていた原稿を虎太
郎に渡す。

すみれ「はい。身分証」

虎太郎、原稿をまじまじと見つめ、唾を
飲み込む。

すみれ「とりあえずそっちのも見せてくんない？」

虎太郎「お、おう」

虎太郎、仕上げた原稿をすみれに渡す。
すみれ、ササッと数枚みた後、机の上に置く。

すみれ「ふうん。じゃ、今日はもう帰っていいから。明日、同じ時間」

虎太郎「お、おう」

○虎太郎のマンション・浴室（夜）

狭いユニットバス。虎太郎、入浴中。

アヒルのおもちゃに話しかけている。

虎太郎「（嫌味っぽいモノマネ）医療漫画の作者は男、っていうのは固定概念。

それは固定概念じゃなくて、一般常識って言うんだよ！」

虎太郎、シャンプーを出そうとポンプを押すが、何度試しても出ない。ふたを開けて、中身を出そうとする。
が、出てこない。

空のボトルを壁に投げつける。

虎太郎「（溜息）」

○すみれのマンション・仕事部屋（翌日）

入室する虎太郎。

すみれ、すでにおり、漫画を描いてる。

昨日と同じ、椅子の上で体育座りの姿勢。

虎太郎、席の上に漫画の描き方のハウツ

ー本が山積みになされているのを発見する。

虎太郎「（一冊持って）……なんだこれ」

黙って描き続けるすみれ。

虎太郎「先生、これボケ？ つつこんだ方が

いい？」

すみれ「えー、じゃあ試しにつつこんでみて」

虎太郎M「（なにを……、いや待て。きつと、

この子なりに打ち解けてくれよう

としてるんだ。しょうがねえ）」

虎太郎、喉を鳴らし、本を両手に持って、

虎太郎「そうそう、今日は効果線の勉強す

るんだア、ってわしは代々木アニメー

ション学院の新生か！」

すみれ「……（吹き出す）」

虎太郎もほっとして一緒に笑う。

すみれ「（笑いが収まってきた）はあー、ま、

ボケじゃないけどね」

虎太郎「（笑顔のまま）え？」

すみれ、一枚の原稿紙をつまみ上げる。

すみれ「これ、なに」

虎太郎「なになって、お前の原稿だけど」

すみれ「違う。（紙飛行機に折りながら）こ

れは、おじさんの、センスリの処理

にも使えない紙くずっていうの」

すみれ、紙飛行機を投げる。

虎太郎、キャッチしてしわを伸ばす。

虎太郎「なにすんだよ！ これ三時間かかっ

てんだぞ！」

すみれ「へえ、三時間かけてゴミ作ったんだ」

虎太郎「黙って聞いてりや……」

すみれ「全然黙ってないけど」

虎太郎「大体、昨日この原稿を見た上で、今

日も来いって言ったのはそっちだろ

うが。どこがダメか言ってみろよ！」

すみれ「あーもう。うるさいなあ」

すみれ、ペンを思いつきり虎太郎に向けて投げる。

ペンが虎太郎の頬をかすめて、壁に突き刺さる。

すみれ「（詰め寄りながら）ベタはちよいちよいはみ出てる、トーンは指定したものと違うし貼り方が雑、それになにより絵が古い。コロコロイズム引きずりすぎなんだよ」

虎太郎、思わず後ずさり。

すみれ「（なお詰め寄る）そもそも内村が忙しくなるからアシ入れる、入れるってうるさいから入れたのに、書き直しが必要な分、むしろ手間が増えてるんですけど」

壁際に追い込まれる虎太郎。

すみれ「ここは野村再生工場じゃないの。

『最近描いてないし、リハビリがてらアシしよつと』みたいな半端な気

持ちならさあ、（壁ドン）よそに行
ってくんない？」

虎太郎「……」

すみれ、壁ドンをした手でさっき投げた
ペンを壁から引き抜き、自席に戻る。

すみれ「とりあえず、当分はその参考書を見
て勉強。今の段階で任せられるのは
ベタ・ホワイト、消しゴムぐらいか
な。給料分働いているって私が認め
るまで、不足分は雑用で補って」

虎太郎「雑用？」

すみれ「掃除、洗濯、エトセトラエトセトラ」

虎太郎「はあ？ 誰がやるかそんなもん」

すみれ「じゃ、やめるか、雑用以外の方法で
役に立ってよ。嵐のアリーナチケット
ト取るとか」

虎太郎「だから、連載経験者としてのアドバ
イスをだな」

すみれ「（失笑）その実力で？ だからセン
ズリ処理紙製造機って言われるのよ」

虎太郎 「お前しか言っただけよ……」

すみれ 「作品の価値はすべてからく他己評価なの。それぐらいわかるでしょ？ 評価する者が法律であり、神。その私に、使えないって言ってるんだから、使えないのよ。はっきり言うけど、今のおじさんの正当なアシ代、三十円だから」

虎太郎 「ビッグカツ一枚分……」

○居酒屋（夜）

大衆的な居酒屋のテーブル席に、虎太郎と内村。

虎太郎 「あのクソガキ。何様なんだよ」

内村 「言ったじゃないですか、トリツキーな人だって」

虎太郎 「トリツキー、なんて優しいもんじゃないよ。どうしつけしたらあんな風に育つんだ」

内村 「まあ、そりゃ偉そうにもなりますよ」

○（回想） 光栄出版社・会議室

内村、興奮した様子ですみれの原稿を読んでいる。

内村の声「あまりこういう言い方したくないんですけど、ああいうのを十年に一人の逸材って呼ぶんでしょうね。持ち込みの時点で、原稿からオラが違いました」

○（同） 光栄出版社・ホール

横断幕に『窪塚賞・贈呈式』。

社長から賞状を受け取るすみれ。

内村の声「持ち込み作を試しに窪塚賞に出したら、大賞、本誌読み切り、そして連載とすんなり行きましたし」

○（同） とある本屋

売り場に積んである『極道ドクター』が
どンドン売れていく。

内村の声「その連載も開始から三年経った今でも大人気。おまけに作者本人にも華があるんだから最強ですよね」

（回想終了）

○居酒屋（夜）

虎太郎「ふん。先輩にろくに挨拶もできないクソガキだけだな」

内村「ていうか、その場で『どすこいやスシ』のことは言えばよかったじゃないですか。ギャグ漫画で三百万部と聞けば態度も少しは改まりますよ、きつと」

虎太郎「……」

内村「え、僕なんか変なこと言いました？」

虎太郎「それはできない」

内村「なんでですか」

虎太郎「いや、あいつの机の上にき、なんでか知らないけど、『どすこい』の1巻があっただよ」

○フラッシュ

すみれの仕事部屋。

『どすこい！ヤスシ』の1巻を見つめる

虎太郎。表紙が色褪せており、ページも
変色している。

虎太郎の声「ボロボロの状態でさ」

○（戻って）居酒屋（夜）

虎太郎「そんなに好きな漫画の作者が、こんな
なお粗末な状態だと知ったらどうす
るよ。幻滅だろ」

内村「そうですかね。単純に嬉しいですけ
ど、僕だったら」

虎太郎、生ビールを流し込む。

内村「まあ、別に先生の自由なんでどっち
でもいいですけど、こんな時にやめ
たりしないでくださいよ。締切が迫
ってますから」

虎太郎「……わかってるよ」

虎太郎、「半年分の家賃、半年分の家賃、半年分の家賃」と自分に言い聞かせる。

(以降カットバック)

○虎太郎のアパート・居間

虎太郎、就寝中。

電話が鳴り、寝ぼけながら出る。

虎太郎「はい、もしもし」

すみれの声「あと1時間が出る。早く来て」

虎太郎、プー、プーと鳴る電話を耳にあてて固まっている。

○美容院

虎太郎の運転する車が止まる。

すみれ、後部座席で原稿を描いている。

虎太郎「まったく、なんで俺がお前を美容院に

送らなきゃいけないんだよ」

すみれ「(道具を鞆にしまって)アシとアッ

シーは紙一重でしょ。それじゃ」

すみれ、車を出る。

○虎太郎のアパート・居間

虎太郎、面倒くさそうにハウツー本の課題を模写していく。

虎太郎「はあ、できた」

と、ゴミ箱に1冊目のハウツー本が捨てられる。

○表参道・アップルストア（早朝）

開店を今かと待っている行列。

虎太郎、凍えながら先頭で待っている。

近づくテレビの中継スタッフ。

女子アナ「見てください、この行列！　こん

な早朝から本当にバカ……、（咳

払い）熱心ですねえ！　みなさま

ん、新しいリングフォンを早く、

手に入れたいですかあ！？」

行列の客「（一斉に）おおおう！」

虎太郎だけ苦い表情。

ティーンシャツ姿の店員が数名、テクノ音

楽に合わせてフォーメーションダンスをしながらカウントダウンをし始める。

「ゼロ」と共に店舗のドアが開き、客がなだれ込む。

虎太郎、背中を押されて、パニックになりながらも入店。

× × ×

店の外で待っているすみれに、リンゴフオンの箱を渡す虎太郎。服がボロボロ。

すみれ「遅い」

膝から崩れ落ちる虎太郎。

○虎太郎のアパート・居間

虎太郎、真面目にハウツー本に取り組んでいる。

虎太郎「できた」

ゴミ箱に2冊目の本が捨てられる。

○すみれのマンション・仕事部屋

作業中の二人。

すみれ「やり直し。ベタのグラデーションが

下手くそ」

すみれ、原稿用紙を床に落とす。ヒラヒ

ラとゆっくり落ちる。

すみれ「床に就く前に取ってねー」

虎太郎「机に置いとけばいいだろ」

すみれ「アシ料金、二十円」

虎太郎、ダイブして原稿が床に着く寸前に捕る。

× × ×

すみれ、また原稿用紙を投げる。

すみれ「やり直し。背景のパスが下手くそ」

虎太郎「え、ちょ」

またも床につく直前で原稿を捕る。

× × ×

すみれ、三度原稿を投げる。

すみれ「やり直し。トーンフラッシュが雑」

虎太郎、予め席を立って、原稿をキヤツチする態勢に入っている。

が、すみれ、今まで落としていた机の側

と反対の側に原稿を落とす。

逆をつかれた虎太郎、ダイブして原稿を捕る。

× × ×

すみれ「やり直し」

右にダイブする虎太郎。

× × ×

すみれ「やり直し」

左にダイブする虎太郎。

× × ×

すみれの「やり直し」という声、ヒラヒラと落ちる原稿、ダイブする虎太郎のシーンが混じり合う。

虎太郎「（床で寝たまま）こいつ、楽しんでやがる……」

○虎太郎のアパート・居間

真剣にハウツー本の課題に取り組んでい
る虎太郎。

虎太郎「ぬおおお！ 終わったぞ、こら！」

本をゴミ箱に捨てる。初日にもらったハウツー本が全てゴミ箱に入っている。

(カットバック終了)

○すみれのマンション・作業部屋

虎太郎が最初に来た頃、原稿のアップ。

お世辞にも上手とは言えない。

虎太郎、ライザップのメロディを歌う。

虎太郎「ずーんちずーんち」

最近描いた原稿にすり替え、

虎太郎「ていんねね、ていいていねー。見

ろよこれ。意外や意外、ハウツー本

も馬鹿にできねえな」

絵のレベルが明らかに上がっている。

虎太郎、原稿をすみれの顔の前にちらつ

かせている。

すみれ「スタートラインに立っただけでしょ。

いや、スパイクの紐をようやく結べ

たってところか」

虎太郎「なんとでも言え。俺は今気分がいい

んだ。本気でまた持ち込みとか始めようかな」

すみれ「持ち込みって。やっぱり最初にプロ
っ言ってたのは嘘だったんだ」

虎太郎「嘘じゃねえよ。てかやっぱりってな
んだ」

すみれ「だってプロは持ち込みしないし」

虎太郎「あのな、これには深い深いわけが」

すみれ、これ見よがしにヘッドホンを装着して立ち上がる。

すみれ「出かけるから、車。よし、今日は結構外回りの予定が詰まっているから

ハードだ。頑張れ」

虎太郎「え、ありがとう」

すみれ「は？　今のは自分へのエールなんだ
けど。きもっ」

虎太郎「……あーそうですか」

○慶智大学附属病院（外観）

都内の大きな大学病院。

○同・入り口

虎太郎の運転で、車が到着。

すみれ、後部座席で原稿を描いている。

虎太郎「ついたぞ」

すみれ「……（夢中）」

虎太郎「おい、ついたぞー」

すみれ「（舌打ち）あとひとコマだけ」

バックミラーですみれの様子を眺める

虎太郎。

虎太郎「てか、なんで病院に来たんだけ」

すみれ「医療監修の先生に、今週も問題ない

か見てもらうの。……できたっ。

（車を降りる）駐車場で待ってて」

と、車を降りるすみれ。建物の入り口に

向かう。

虎太郎「へいへい」

○同・駐車場

車に寄りかかって、缶コーヒーを飲んで

いる虎太郎。

と、携帯電話に着信。『内村（チャンス）』との表示。

虎太郎「もしもし」

○光栄出版本社・月刊チャンス編集部

内村「西野先生ですか。よかった、繋がって。周りに墨田先生いませんか」

○慶智大学附属病院・駐車場

虎太郎「周りにはいない。どこにいるかはわかるけど」

内村の声「そうでしたか。いや、直接電話もしたんですけど、電源をオフってるみたいで」

虎太郎「どうかした？」

内村の声「来週のカラーについて急ぎで確認したいことがあって電話したんですけど……困ったなあ。いつ行かれました？」

虎太郎 「十分前ぐらいかな。急ぎなら、俺が

聞きに行こうか？」

内村の声 「すみません、お願いしてもいいで

すか」

虎太郎 「へいへい（切る）」

○同・受付

部屋の方向を案内する受付スタッフ。

礼を言う虎太郎。

○同・病棟・308号室

部屋の前で立つ虎太郎。

手に持っているメモと、部屋の表札の番号を見比べる。番号の下に、「郡司かおり様」とある。

静かにドアを開ける虎太郎。

パイプ椅子の上で、いつもの体育座りの姿勢で原稿を描いているすみれがいる。ベッドで寝ている郡司かおり（70）と二人きり。

かおり「すみれちゃんの描いた漫画のドラマ

見れたらいいわね……」

すみれ「あともう少し。来月から放送だよ」

かおり「そうかい、そうかい。すみれちゃん

は出るのかい？」

すみれ「出ないよ。女優じゃないし」

かおり「そうかい、そうかい。楽しみだわあ。

手術、頑張らなきゃね」

すみれ「お婆あちゃん、きっと大丈夫だよ」

すみれ、かおりの手を握る。

かおりも握り返す。

かおり「あなた、本当にいい子ね」

虎太郎、ゆっくりとドアを閉める。

○同・廊下

虎太郎、内村に電話をかけている。

虎太郎「あ、内村？ 悪い、先生話し込んじ

やってるから、また後で折り返しさ

せるわ（切る）」

○同・駐車場

車の中で待機中の虎太郎。

すみれ、後部座席に乗り込む。

虎太郎、ミラーですみれの様子を伺う。

すみれ「ぼーつとしてないでさっさと出して」

虎太郎「あ、おう。えーつと、次はドラマの

打ち合わせか」

車が発進。

○光栄出版本社・会議室

すみれ、内村、テレビ局のディレクター、

プロデューサーで会議中。

すみれ、ペンでテーブルを叩いている。

虎太郎、端っこで暇そうにしている。

内村 「次、このシーンですが、男性の患者

を女性に変えた理由は？」

プロデューサー「あー、主役の事務所からそ

の子を出せないかと言われて、押さ

れてオーケーしたんですが……」

恐る恐るすみれを見る出席者。

すみれ 「まあ、別にいいですよ。ただ、その病状は若い人の場合、圧倒的に男性の方が発症しやすいことに言及していただけますか」

プロデューサー 「わかりました」

内村 「それでは、三話も大丈夫そうですね」
ディレクター 「いやあ、一安心ですね。あ、そうだ。金曜にドラマの記者会見あるんですけど、急遽で恐縮なんですけど、是非先生にも檀上に上がっていただければと思うのですが」

内村 「金と言うと、明後日ですか」

すみれ 「私は構いませんけど」

内村 「でも、来週号の締切に間に合いますかね。三周年記念の週なんで、絶対落とせないですよ」

すみれ 「あれ（虎太郎を指さし）がいますし、明日やればなんとかいけますよ」

ディレクター 「会見では一つか二つぐらい質問されるんですけど、予め答え教え

でもらってもいいですか。念のため」

すみれ「はい」

ディレクター「一つ目が漫画家を目指したき

っかけ。二個目は第1話を見た感想

なんですけど」

すみれ「はあ。目指したきっかけは多分『ど

すこいやスシ』という漫画を読んで

衝撃を受けたから、ですかね」

虎太郎と内村、顔を見合わせる。

すみれ「ドラマの感想は、漫画では表現しき

れない臨場感や迫力が映像で伝わっ

てきて、原作者として刺激を受けた、

でいいですか？」

ディレクター「(メモ取りつつ) 刺激……と。

はい、ばっちりです。このままお答

えください」

すみれ「わかりました」

プロデューサー「先生は外見も華やかですし、

いい宣伝になりますよ。翌朝の情報

番組に流れるように手配します」

内村「よろしく願います」

○同・廊下

すみれとテレビ局の人たちが先行して、
話しながら歩いている。

虎太郎と内村が数歩後ろで続く。

内村「さっきの話、嬉しいですか？」

虎太郎「（嬉しい）いや、別に」

内村「またまたー」

内村、虎太郎の横っ腹をひじでつつく。

虎太郎「いちいちうるせえな。……（すみれ

たちを見て）にしても忙しそうだな」

内村「はい。仕事の量だけで言うと、普通の先生なら本当はもう3人ぐらいアシスタントさんが欲しいところなんですけど。本当に先生様々です」

虎太郎「……」

すみれを見つめる虎太郎。

○マンション・すみれの部屋・リビング（夜）

すみれ、作業中。タバコをくゆらせている。ひどく疲れている様子。

虎太郎「あのさ」

すみれ「……」

虎太郎「あのさ！」

すみれ「え？ なに」

虎太郎「考えたんだけど、俺もうそろそろもつと担当領域増やそうか？ トーン貼りとか、背景とか、脇役とか。だいぶ勘が戻ってきたし」

すみれ「なんで？」

虎太郎「いや、そうしたら少し負担減るかもって思ってたよ。」

すみれ「誰の？」

虎太郎「先生の。今日は水曜日だろ？ 金曜は記者会見に出るから、再来週号の極道ドクターは明日中に仕上げなきゃ間に合わないだろ。一人じゃきついつて」

すみれ「あつ、間違えた。（舌打ち）だめだ、

集中力切れた。休憩しよ。え、なん
だっけ」

虎太郎「だから、俺の分担を増やさないかっ
て。絵も大分先生の絵柄に近づいて
いると思う」

すみれ「……それぐらいならいっか。土曜は
仕事にならなそうだし」

虎太郎「任しとけ」

虎太郎、すみれの机まで歩き、原稿を何
枚か選ぶ。

虎太郎「これと、これと、これもそうか。結
構たまってるなあ」

すみれ「……おじさん、吸う人だっけ」

虎太郎「え、まあ嗜む程度」

すみれ、一本差し出す。

虎太郎、驚いた様子で口に咥える。

虎太郎「（火つけて）驚いたな」

すみれ「休憩中は相手も吸ってくれた方が気
遣わなくて済むから」

虎太郎「気なんか遣ったことあんのかよ」

すみれ「（考えて）ないね」

くすつと笑う二人。

虎太郎「先生はなんで医療漫画描こうと思っ

たんだよ」

すみれ「別に無理して間、埋めなくていいよ」

虎太郎「本当に気になるんだ。あんな題材、

普通はそんな若さで描けないし、描

こうともしないだろうよ」

すみれ「……おばあちゃんが昔から入院しが

ちでさ。学生のころからほぼ毎日お

見舞いに行ってたんだ」

虎太郎「へえ」

すみれ「で、お見舞いについても基本暇だから

1日中絵描いてたわけ。最初はドラ

えもんとかピカチュウとか。けど、

それに飽きて、ひたすら病室の内部

描き始めたのが今に繋がってるのか

な。知らんけど。部屋に良さげな机

とかないから、おかげさまで今でも

あの描き方だよ」

虎太郎「あーこれな」

と、体育座りをする虎太郎。

すみれ「そうそう、それ。癖ってなかなか治

らないからね」

虎太郎「へえ……」

すみれ、タバコを灰皿に押し付ける。

すみれ「さて、仕事に戻るか」

虎太郎「おう。（原稿を掲げて）これ、やっ

とくわ」

虎太郎もタバコを消し、自席に向かう。

どこか充実している様子。

○虎太郎のアパート（深夜）

虎太郎、タバコを吸いながら、原稿を仕

上げている。

机の上にメガシヤキや缶コーヒーの空き

缶。

虎太郎、何度か寝かけるが、ぎりぎりの

ところで目が覚める。

× × ×

煙の匂いで、徐々に目が覚める虎太郎。

タバコの不始末で原稿が燃えている。

虎太郎「な、なんじゃこりゃ！」

火災報知器が鳴り響く。

慌てふためく虎太郎。

息で吹き消そうとしたり、ポケットには入っている目薬で消そうとしたりするが、当然消えない。

と、ガウン姿のおばさん（58）が水の入ったバケツを片手に部屋に突入。

大家 「（水をかける態勢）どきな！」

虎太郎「ま、待って！」

原稿が乗っているテーブルの前に立ちはだかる虎太郎。

だが、大量の水が顔にかかる。

○マンション・すみれの部屋・リビング（夜）

土下座をしている虎太郎。

虎太郎「本当にすまん！」

すみれ、寝起き姿。

すみれ「……」

虎太郎「せっかく俺を信頼して任せてもらったのにこんなことになってしまつて。しかも明日中に原稿を仕上げないといけないのに。本当に申し訳ない！許してもらえないと思うけど、なんとか間に合うように頑張るから！」

すみれ「……」

虎太郎「（顔を上げ）なんか言ってくれないか。罵倒でもいいから」

すみれ「内村に焼肉おごってもらわなきゃ」

虎太郎「は？」

すみれ「いや、おじさんがミスするかしないかで叙々苑賭けてたんだよね」

虎太郎「じよ、じよじよ？」

すみれ「（笑う）まさか燃やすところまでは想像できなかったなあ。トーンの貼り間違いとか、パスがずれるとかは想像の範囲内だったけど。君、やるねえ」

すみれ、虎太郎が持ち帰った原稿を捕り出す。すでに最後まで仕上げている。

虎太郎「これは……」

すみれ「パソコンでバックアップ取ってたのよ。データを印刷すれば、1時間で新しい原稿にトレースし直して、おじさんに渡した状態まで持って行ける。火事の連絡を受けた瞬間から描き始めたから、とっくに終わった。めでたしめでたし」

虎太郎に原稿を渡すすみれ。

虎太郎、わなわなと震える。

虎太郎「なんだそれ」

すみれ「？」

虎太郎「これ、まだそのバックアップがあるんだよな？」

すみれ「あるけど」

虎太郎「そっか。安心したわ」

虎太郎、原稿をビリビリに破る。

虎太郎「ごめんなあ、先生。また失敗しちゃ

ったよ。悪いけどまた作り直さなきやだな。すまんすまん」

すみれ「……」

すみれ、眉一つ動かさない。

虎太郎「人をバカにすんのもいい加減にしろよ。なにがバックアップだよ。結局のところ、俺がどんだけ腕を上げようとしたって、役に立とうとしたって、俺のこと何一つ信頼してねえじやねえか！」

虎太郎、おもむろにすみれの机の上にある『どすこいやスシ』を掴む。

虎太郎「この本、描いたの俺。西野コウタロウってあんだろ？ ペンネーム。つまりだな、俺がいなかったら漫画家墨田スミロウも、『極道ドクター』も、このマンションもドラマも全部、なかったんだよ」

すみれ「……」

虎太郎「確かに俺はへまをやらかしたかもし

れない。でも、お前の人生にとって
一番重要なターニングポイントを生
み出した男なんだよ、少しは敬え！」

すみれ「言いたいことはそれだけ？」

すみれ、タバコに火をつける。

すみれ「あのさ、なにか勘違いしてない？」

私が『どすこいやスシ』に衝撃受け
たのは、こんなに下手くそでもプロ
になれるんだ、という事実に対して
だから。悪いけど」

虎太郎「え……」

すみれ「初めてそれを読んだ瞬間、これだ、
と思ったね。私のが数億倍絵がうま
いし、こんな単純なストーリーが人
気なら間違いなくこの世界で食って
行けると確信したの。間違いなく。
そういう意味では感謝してるよ。勇
気をくれてありがとうって」

虎太郎、言葉が出てこない。

すみれ「話はそれだけなら明日の朝までに自

分で出したゴミ、捨てといて。あと
そのクソの役にも立たないプライド
もね」

すみれ、部屋を出ていく。

○道（深夜）

とぼとぼと帰路につく虎太郎。

煙草に火をつけようとするが、ライター
の火がつかない。何度か試すが、やはり
つかない。

虎太郎「くそつたれが！」

と、ライターを地面にたたきつける。

近くにあるゴミ集積所のゴミ箱をなぎ倒
し、ゴミ袋を蹴り上げる。

虎太郎「明日が事実上の締切なんだ。俺がい
なきや泣きついてくるに決まってる」

○虎太郎のアパート・居間（翌日）

虎太郎、テレビゲームをプレイ中。

スマホをちらっと見る。反応なし。

時計を見ると、午後の一時をさしている。

× × ×

時計が五時をさしている。

虎太郎、そわそわし始めている。

と、ドアのチャイムが鳴る。

急いで玄関に向かう虎太郎。

虎太郎「（ドアを開け）はい」

内村「はい、じゃないっすよ。早く墨田先

生のところに行ってください」

虎太郎「なんだ、お前か……」

内村「え、なんですか」

虎太郎「いや、なんでもない」

内村「聴きましたよ。昨日トラブル起こし

たみたいじゃないですか。勘弁して

くださいよ、締切直前に」

虎太郎「……俺は悪くない」

内村「そんな子供じみたことを言わないで

くださいよ。先生呆れてましたよ？

なんでも同じペー지를2回描き直さ

せた、とかで。しかもそれを3ペー

ジ分」

虎太郎 「大丈夫だよ、バックアップなんちゃ
らがあるんだとよ」

内村 「……なんすかそれ」

虎太郎 「いや、だから、よくわかんないけど
原稿のデータをパソコンに取り込む
と何回失敗しても、下書き終わった
状態から始められるんだと。途中で
セーブみたいなものだな」

内村 「そんなソフト、墨田先生は使ってい
ません」

虎太郎 「でも確かにそう言ってた」

内村 「墨田先生は結構アナログ派なんです。
そもそもあの職場にパソコンないじ
やないですか」

虎太郎 「（動揺）それじゃあ……。まさか」

内村、虎太郎の両肩を掴み、

内村 「お許してください」

虎太郎 「え？」

内村、虎太郎を思いつきり殴る。

虎太郎、リビングに倒れ込む。

内村、虎太郎またがり、胸倉を掴む。

内村 「もう我慢できませんいつまで過去の栄光に固執するんです！ そんなだから目が曇るんだ！ こんだけ言うてもわからないんなら教えてあげよ！ お前のミスをカバーするため、先生がわざわざ描き直してくれましたよ！ 徹夜で！ まだわからないんですか！」

虎太郎 「いや、それはもうわかってるけど」

内村 「あ、そうですか」

虎太郎 「……」

内村 「……」

内村、咳払いをして、立つ。

内村 「とにかく。これ以上先生に迷惑をかけるないでくださいよ。先生のおばあちゃん、今日手術なんです」

虎太郎 「え？」

○慶智大学病院・廊下

慶智大学病院。

手術台に乗せられて、連れて行かれるか

おり。

かおり「すみれちゃんはおるかい？」

看護師「来られていますよ。安心してください」

かおり「よかった」

○（戻って）虎太郎のアパート・居間

内村「ずっと病院に通われてるでしょ？」

今日が手術日なんです」

虎太郎「そんな」

内村「だから、どうしても昨日までに入稿
できるよう、頑張ってたんだと思

います。三周年記念号はどうしてもず

らせないですし」

虎太郎「まったく。無意味に人を殴ってないで、

それを早く言え」

虎太郎、走り出す。

内村「え、どこ行くんですか？」

虎太郎「（振り返り）アシスタントの行く場

所なんて一つしかねえだろ？」

部屋の外に飛び出す虎太郎。

内村、玄関先から見送り、

内村「ラッキータイガー頑張れ！ 今度の

レースは絶対させよ！」

○道端

全速力で走る虎太郎。

○フラッシュ

すみれの仕事部屋。

すみれ「おばあちゃん子だったからねえ」

○（戻って）道端

走る虎太郎。

○フラッシュ

病室でかおりの手を握るすみれ。

かおり「すみれちゃんの描いた漫画のドラマ

見れたらいいわね……」

すみれ「おばあちゃん、きっと大丈夫よ」

○（戻って）道端

走る虎太郎。

虎太郎「おれは、大馬鹿者だあああ！」

スピードが上がる。

○マンション・すみれの部屋・リビング

ドアを勢いよく開ける虎太郎。息切れしている。

すみれ、作業中。

すみれ、一瞬虎太郎に目をやり、また作業に戻る。

虎太郎「（息切れ）しゅじゅ、はあはあ、し

ゅじゅ、はあはあ、じゅじゅちゅ！」

虎太郎、吐きそうになっている。

疲れて思わず座り込む。

すみれ「きもつ、なに？」

虎太郎「（徐々に収まってきて）手術、行っ

て来いよ。ここは、俺が、守るから」

すみれ「え？」

虎太郎「今日は休んで悪かった。ガキみたい
なこととして悪かった。後で土下座で
も雑用でもなんでもするからさ、今
だけは俺を信じてばあさんのところ
に行ってやれ。じゃなきや、俺が一
生この日を後悔するはめになるじゃ
ねえか」

すみれ「……」

虎太郎「俺、嬉しかったんだ。アシとして、
ほんの少しでも役に立てて。『どす
こい』が終わって以来、まるつきり
創作意欲がなくなってしまつてよ。
そうすると、だんだん俺の漫画は誰
にも求められなくなって。しまい
は描く気力すら失せた。俺の漫画は
死にかけだったんだ。今のお前のば
あさんみたいに」

すみれ「……」

虎太郎 「先生には、なんつーか、ヒーリング能力あるんだ。ほら、あのグリーンマイルの黒人みたいな。悔しいけど、先生にはっぴかけられたらなんだってやれるような気になる、っていうか。お前のばあさんが助かったら、俺の漫画も助かる気がするんだ。勝手に自分勝手な投影をしてるのはわかってるけど、助かると思う……って、なに言ってるんだろーな俺」

すみれ、ペンを置き、虎太郎の前に座り込む。

顔が段々と崩れ始める。

虎太郎 「……怖いのか。そうか。そうだよな。

怖いよな、向き合うのは」

虎太郎、すみれの頭をポンポンしようと手を伸ばす。

すみれ、表情が決壊寸前。

すみれ 「（大きなくしゃみ）」

スーパースローモーションで風と鼻水が

虎太郎の顔にかかる。

すみれ「あぁー。(鼻水ふいて)てかなにひ
とりで盛り上がっちゃってんの」

虎太郎「……」

すみれ「おばあちゃんただのヘルニアなんだ
けど。あれよく再発するでしょ」

○慶智病院・手術室

手術台で寝ているかおり。

かおり「これで腰の痛みが減るニア！ なん
ちゃって」

看護師「麻醉打ちまーす」

かおり「うぐっ！」

○(戻って)マンション・すみれの部屋・リ

ビング

虎太郎「ヘルニア？」

すみれ「当たり前だろ。重大な病気ならそう
簡単に面会できないでしょ」

虎太郎「いや、だってばあさん、手術が成功

したら見るからね、って言ってたじやん。これ、完全な死亡フラグだろ」
すみれ「テレビっこだからねー。ヘルニアっ
て座るだけで痛いんだよ。だから直
ったら思う存分テレビ見たいんだっ
てさ。アメトークとか」

虎太郎「……マジかよ」

虎太郎、倒れ込む。

○帝京ホテル・鶴来の間

ドラマ化の記者会見。

出演者と主要なスタッフが壇上に乗がっ
ている。

虎太郎、関係者席に座っている。

女優1「四谷監督の作品が大好きなので、こ
のドラマのメンバーの一人でいること
が最高に幸せです！」

拍手。

司会者「どうもありがとうございます。い
やあ、かわいらしいですね。さて、次

はこのドラマの原作者である、墨田スミロウ先生にご挨拶を賜りたいと思います。皆様、盛大な拍手をお願い致します！」

拍手。

すみれ「こんにちは。原作者の墨田です」

司会者「ここで、時間の関係もありますので、二点ほど、墨田先生へのご質問を用意しております。まず1点目。漫画家を目指されたきっかけはなんだったんでしょう」

すみれ「『どすこいやスシ』という漫画を読んで衝撃を受けたところです」

司会者「ほう。具体的には」

すみれ「その本って、吐くほど絵が下手くそで、……泣けるほど勇気をもらえるんです。漫画家というのは、不安定な職です。絵が上手だから売れるわけではありません。ストーリー作りがうまくてもそうです。描いて、描

虎太郎、笑いながら会場を後にする。

(完)